
手に手を繋ぐ

夢二つ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手に手を繋ぐ

【Nコード】

N5029U

【作者名】

夢二つ

【あらすじ】

俺たちの秘密基地を作りに行く。少年時代にやり残したイベントの一つである。こんな事に、夏休みを返上して付き合う奴らが出てくれるだけでも幸せ者である。秘密基地の作る途中に事件が起こった。人の手を見つけたのである。ミステリー？いいや、違う。どちらかといえばファンタジーだ。だってこの手は生きているんだから。

懐かしい青春にちよこつとファンタジーを味付けした、変な話で

す。

プロローグ 昔話

あなたは手に触れるだけで、その人が誰であるのかわかりますか？

あなたは手を握ることで全てを伝えることができますか？

私は手が無くなることを恐れています。いつも握っている、あの手を離すことをしてはなりません。どんなに辛くても、その手を握っていないければならないのです。

一瞬で私は迷子になりました。目の前が、白い世界に覆われたのです。隣には私の大切な人。少しずつ白に覆われていく。あなたの体が、顔が覆われていく。最後にはつないだ手も覆われていく。何も見えないこの白の世界。彼が私を突き飛ばす。握る手は離されました。私は黒の世界へと押し込まれる。彼はまだ、白の世界。彼は重い鉄板でゆっくりと塞いでいく。確実に分離されいく、私と彼の世界。彼が何か言っている。私は聞こえなかった。笑っていたように思います。私は泣いていたのに。耳を割くような音。ここも崩れてしまうのでしょうか。あなたがまた、私の手を引っ張ってくれるのを心待ちにしております。それまで私は地球の真ん中で眠っております。だから・・・・・・・・だから・・・・・・・・次に目覚める時はあなたの手で。

一人目のメンバー

僕は小学校時代にやり残した事がある。公園の隅や空き地、建物の廃墟などを利用して作るあれだ。秘密基地と呼ばれる、青春のたまり場を作ることである。

これまでに女っ気の事柄以外の青春はあらかた経験してきたものだと思っている。しかし、秘密基地を作ったことがないという青春はいかなものだろうか？

友と共同作業で作りあげ、そして週刊誌や人生ゲーム、ちよつと大人の雑誌を持ち込んだりもしたりする。考えれば考えるだけで楽しそうではないだろうか？

夏休みにはいい、我が家を出ればうだるような暑さ。蝉は歓喜の大合唱。アスファルトの照り返しだけで、ミイラ化しそうだ。どうだろう、絶好の秘密基地制作日和じゃないか。携帯電話を強く握る。「誰も付き合わないよな」

高校最後の夏休みであり、受験シーズン真っ盛りだもんな。無駄に携帯を開けたり閉めたりして、小気味よい音を楽しむ。庭に乱雑に置かれた自転車を道路まで押す。

「さてと、出掛けるかな」

夏休み初日から湧き水を汲みに行く。母親に借金があるため、パシリとして良いように使われている。わき水は山の麓からわき出ており、そこまで坂が続いている。25度くらいの坂ともなれば、これはなかなか重労働。自分の足となるは籠付きのハンドルが曲がつたクールなスタイル。そう、ママチャリだ。スペック的に文句のつけようがあるだろうか。むろん愚痴っていることは言うまでもない。

川沿いに沿って真っ直ぐ進み、右手へと折れると坂道へと差し掛かる。

「きつつつ」

中盤にさしかかり、ペダルの重みが増してくる。しかし不思議なことに、ここまで来ると男の意地とやらが働くらしい。地面に足をつけると負けたなルールが頭の中で出来上がる。残るは四分の一とあったところか。

「・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・」

ポイントまであと少し。

「うつしや」

蝉の声が歓声にすら聞こえる。ふと、歓声に混ざってベルの音。颯爽と僕を追い越す自転車。操縦者は女の子。更に立ちこぎすらしていない。

シヨックのあまりに足を付く。ハンドルを離れた僕の自転車は無残にもアスファルトを削った。

頭を垂らし、自転車を押しながらの到着。彼女は、水汲み用のボトルを4本持つてきていた。こちら4本をカゴに入れて持つてきている。

「やつぽー、こんたー」

僕の名前は岩城根太である。響きが男らしくないのであまり自分の名前は好きではない。

彼女の真新しい電動自転車が視界に入る。

「おはよう真佐美、電チャリくれ」

ついストレートな言葉を投げてしまふ。電チャリがあればこんな坂道手放しで登りきってやれる。

彼女の名前は飛田真佐美。八分刈りの髪型とボーイッシュな出で立ちではあるが、外見とはギャップが激しいほどのお金持ちである。

「バッテリー切れたらあげるよー」

一般市民の感覚とは少しズレがあると感じているのは、僕だけではないだろう。電チャリを消しゴム感覚で人に譲ってしまうのだから。

「うん、やっぱりいいや。大切に使ってやって」

真佐美はただ、素直なだけである。通行人からお金を下さいと言われれば、財布を渡してしまうのではないだろうか。ある意味、一番達が悪い性格である。

「うーん、そうするよ」

先に水を汲み終えた真佐美は、水の入ったペットボトルを高く挙げる。日光を浴びてキラキラと乱反射する。

僕も籠の中に放り込んだペットボトルを取り出す。岩と岩の間に挟まれた竹筒の切っ先から水があふれている。地面を叩く水の音が体の中心部から冷やしていく。

ペットボトルの口を竹筒の切っ先へと宛がう。コンビニで売られている天然水の完成。

全てのペットボトルに水を入れ終わり、カゴの中へと投げる。真佐美はその間待ってくれていたらしい。山の入口を見つめていた。入口とは言っても、特別に知名度がある山ではないので、人間の手が加えられていない。そのため獣道と言ったほうが正しい表現かもしれない。

「どうした、真佐美？」

真佐美とは小学校からの付き合い。次ぎの言葉はだいたいの予想できる。

「高校最後の年なのにな」

僕も釣られるように、この山の入口を見る。一瞬、子供の影が笑いながら山の奥へと吸い込まれたように思えた。影は4人分。過去の僕たちがだらうか？

とても楽しかった。ガキの時代、ここの山はドキドキとワクワクが詰まっていた。しかし今はちっぽけな山でありただの風景の一部になってしまっている。

真佐美を誘ってみよう。僕と同じで時間を持て余す受験生仲間。きつと魅力的な提案であると思ってくれる。

「この山に四人の秘密基地を作らない」

真佐美は笑う。そういえば、秘密基地って作ったことない
ーと笑う。

「うん」

真佐美の首が縦に揺れる。夏休み暇なんだーと。

「夏の天王山って暇だよなー」と僕も肯定。

僕たちは進学校に通う。成績は真佐美と僕が上位をワン
ツーフイニッシュで飾っている。受験勉強なんてしないでよろしい。
ただいつもの面子を揃えるためには残り二人が危険信号。
成績のビリからワンツーフイニッシュ。

今、まさに死に物狂いで学業に勤しんでいるだろう。彼
等にもプライドがあるらしく、奇跡の逆転劇を上演すると、鼻息が
荒かった。

さーどうやって誘う？

携帯を閉じたり開いたりして小気味よい音を楽しむ。

アホ二人

真佐美と話し合った結果、勝人と和博は私に任せてとのこと。

考えがあるのだろうか？ お金絡みかな？

適当に推理して訪ねてみる。しかしながら、結果報告は明日すること。

気にはなるが、真佐美を誘ったからには僕も行動を起こさなければならぬ。やることがあるので、ここで真佐美とは別れる。

まずは、我等が秘密基地として最適な空間を探し出さなければならぬ。とは言っても、僕はだいたい目処が立っている。あそこしかないだろう。

山の中へ足を踏み入れる。木々が日光を塞いでいるため、比較的薄暗く、そして涼しい。

多分この山の頂上に到着するのは、1時間とかからないだろう。

雨が何日も降り続けていたためか、地面は歩きやすい。

足を踏み締めるたびに、小枝や枯れ葉による音楽が響く。

懐かしくて、そして変わらない山。僕たちはこの山の名前すら知らない。ただ僕たちの遊び場として利用した山。それ以上でも以下でもない。

この山を歩き尽くした僕たちは、ここで遊ぶことはなくなっていた。少しずつ遊び方も変わり、集まる場所も変わり、この山には高校へと進学してから寄り付かなくなった。

ここは、あの頃から変わっていないのだろう。目隠ししたって一周出来る。

なんで急に秘密基地を、そしてこの山で作ってやろうと思いつたのかはわからない。このまま大学生へとなるのかと意識した瞬間、寂しさを感じたのかもしれない。

自慢ではないが、僕は将来に不安を感じたことはない。顔はあま

り広くないけれども、親友とも呼べる奴らが三人もいる。学業は言うまでもなく、スポーツもそれなりに出来る。

だから将来に不安を感じない。ただ、過ぎていく過去が楽しければ楽しいほど寂しいのだ。

山道を、慣れた自分の庭のように突き進んでいく。

少しばかり周りより幹が太めな木にクワガタが張り付いている。

樹液が出ており、寄せられたのだろう。

「ノコギリか」

残念。僕はヒラタクワガタが好き。

よく勝人と収穫したクワガタで相撲をとらせた。勝人はノコギリクワガタが好きであり、ヒラタクワガタ好きな僕とはライバル同士であった。

真佐美はカブトムシ派。理由は一番優しいからとのこと。カブトムシは角でちやぶ台返しをするだけで、滅多に相手を殺すことをしないからだ。

一番変わった奴は和博だ。

オオクワガタを見つけるまでは、俺はコクワガタで戦うと意地を張っていた。結局オオクワガタを見つけることはなく、皆に惨敗。特に真佐美のカブトムシにはゴミを丸めて捨てる要領で空中に見事なアーチを描かされていた。

大小の木々から伸びた枝が目前を塞ぐ。徐々に周りは歩きにくく、そして細かい木々が体を引っかけて来る。

もうすぐ見えてくる。僕たちの秘密基地を作る場所。

手で高く伸びた雑草を払う。

そしてぽっかりと開いた円形の空間があった。

やっと四人が入れる空間。天は木々の緑葉でおおわれ、さらに薄暗い。しかし、居心地は悪くない。

確認のために来たけれど、やっぱり僕たちの場所として調度いい

不都合。ここはみんなもよく知っている。

かくれんぼの時、最初のうちはこの空間をよく隠れ場所としていた。警戒されるようになってからは、すぐにこの空間を利用しなくなっただけでも。

しかし、あの二人が納得してくれるかどうかは別の話である。

朝沼勝人は体がデカク、狭いと不満を漏らすだろう。

野崎和博は変なこだわりをもっているので、中々認めてくれないだろう。

僕の性格判断からしてこの二人は、自我が強すぎる。他人の意見を素直には飲み込んでくれないと思う。

取り合えず、この空間を携帯で写真を撮る。真佐美に写真を添付したメールを送る。ここに秘密基地を作ろうと文章を添えて。

すぐに携帯が震える。

やっぱりこの場所なんだね。それだけの文章が綴られたメール。後は任せましたと返信。たぶん僕では、勝人と和博を説得出来ない。

また、すぐに震える。

なんとかなるとおもうよー。短く力強い一言だ。

真佐美はどのようにして誘うのかはわからない。しかし、真佐美は常に僕たち手綱役をしていていた。時間にルーズな勝人も、意地っ張りな和博も、そして常に明後日の方向を見ている僕をまとめてくれている。きつとなんとかなるのだろう。

たまに考える。真佐美は女の子である。女の子同士の友達はもちろんいるが、休日やこの夏休みのように長期休暇はだいたい僕たちと行動している。真佐美以外は言うまでもないが、男である。真佐美は一緒にいて楽しいのだろうか、と。

実際に本人に直接訪ねたこともある。もちろん、楽しいよーと言。ま、それならそれでいいんだけどさ、と珍しく意見が揃った男

三人。

だって男臭いなかに女が混じるだけで、不思議だとかんじてしまう。誰だって一度は聞きたくなる。

ちなみに僕たちは真佐美に告白したことがある。

きっかけは勝人がいったあの一言が始まり。真佐美の胸っておっきいよなと勝人。僕と和博は同時に首を縦に二回揺する。うんうん。

勝人は現代文が非常に苦手である。文章と文章の繋がりがよくわかっていないところがある。

「俺、告白するは」

僕と和博は目を見開く。胸の大きさから告白へと話がどうやってらつながらののだろうか？

そして次ぎの一言である。

「だから、おまえらも告白しろよ」

何が、だからなのだろうか。意味が理解できない。

勝人は携帯を取り出し、電話を架ける。

数秒間の沈黙。

どうしたのーまさとー。微かに漏れる声はまさしく真佐美のもの。僕たちはただ、勝人を見ていることしか出来なかった。

「好きだ。真佐美」

男らしい一言。僕たちは口を開けてほうける。今の僕たちは目と口が開いている状態で固まっている。

わたしもだよー。おそらく意味をそのまま受け止めているのである。緊張感がまるつきりない笑い声。

なおも勝人はつづけた。

「ゴメン、間違えた。真佐美、愛してる」

さすがに、告白だと理解した真佐美は数秒間押し黙る。

僕たちは口を開けたまま、息を飲む。唾が喉を通りにくい。

真佐美は、いつもの調子で答える。わたしは愛してないよー。好

きなだけだよ。

「そうか。わかった」

携帯電話の電源を切って、こちらに顔を向ける。そして言い放つ。
「俺はこれから受験勉強をする」

確か僕の部屋だった。風鈴が風を受け止めて音を響かせる。高二の暇な夏休み。この瞬間、勝人は受験勉強を決意した。いまだに成績はビリである。

勝人が出した条件はもちろん本気であった。断ることも可能だったけれど、あの姿は男らしくかった。ここで断ったら男らしくないだろう。古典的手法であるラブレターを使い、告白した。

真佐美は丸っこい可愛い字で手紙を書いてくれた。

- わたしはあいしてないよ。これからも一緒に遊ぼうね。

パンダさんのシールがおまけに添えられている。そう、僕も振られた。理不尽な心の痛みに心臓が捻れるかと思った。

そして、和博はというと告白したことがあるとうまく逃げた。幼稚園からの付き合いである和博は、四歳の頃に結婚してくださいとプロポーズしたと言う。

真佐美に焼肉と結婚すると言われ、和博は玉砕したらしい。詳しくは聞いていないけど、和博がベジタリアンであることと深く関係していると思う。和博はひよる長く、骨は階段を二段から飛び降りて骨折するほどである。しかし、嫌みなほど顔は整っている。フチナシの眼鏡が様になるインテリ青年。この容姿にして学年で勝人に次ぐ成績の悪さが面白い。このギャップは女の子の心をわしづかみにするらしい。このメンバーで圧倒的に異性からの評判がいいのも和博である。

それから僕たちの関係に変化があったわけではない。真佐美にし

てみれば、達の悪い冗談である。しかしながら、当の本人は気にするそぶりを見せず、いつものサイクルで毎日を回しつづた。勝人と僕が喧嘩して真佐美が仲介して和博が煽る。単調であるが一つ一つが宝石のような日々。

自然に作られたこの空間は、落ち着く。そして頬を撫でる風かと一緒に大小様々な思い出が駆け抜けていく。もし、みんなとお茶会なんかやったりしたら三日は続けることが出来るだろう。

しばらく、涼んでいた僕は木々が揺れ波の音を奏でているかのようだと気づく。

ーここから始まる僕たちの秘密基地作り。そして僕はここで小さなミス、だけど大きなミスをする。

僕は稀にこういうことがある。コーヒーをパソコンに垂らし、どうしようもなく壊してしまう。そんな些細なミスが大きなミスとなる。

お腹が減ってきた僕は、時間を確認するために携帯電話をポケットから再び取り出そうとする。ここまで歩きつばなしの僕は手が汗で湿っていた。携帯電話を滑らしてしまう。空中でキャッチしようと試みる。しかし、掴み損ねてしまい携帯電話を弾いてしまう。

落ち葉やら泥やら小枝もろもろなものに、勢いよく携帯電話が埋もれる。落ちた当たりを払って、探す。

そんなに力強くひっぱたいだろうか？
見つからない。

枯れ葉や小枝を退けて、後はやわらかい腐葉土を掘る。
そこで、違和感。手が奥へ奥へとスルスル進む。
なんだ？穴になっているのか？

手が一本通る、細く深い穴。日陰になっているため奥まで見えな
いが、かなり深い。

くそ。

取り合えず、限界まで手を突っ込もう。

Tシャツの袖を肩まで捲くる。

ゆっくり、伸ばしていく。

伸ばして

伸ばして

伸ばして

僕の手は捕まれた。

何に？

思考が止まる。僕は何を探しているのかも分からなくなる。
引っ張る。が、離れない。これはなんだ？

テレビでよく見る、見えない箱の中身を触る壊さが、初めてわか
る。

無理矢理引き抜き、転がるように山から出ていく。

ありえない、ありえない。

湧き水を汲んだ場所に転がしたママチャリに跨がる。

自転車で駆け降りる坂道がこんなにも気持ち悪いのは初めてだ。

あれは、人の手だった。

無くした携帯電話

自分の部屋で、深くベッドに沈み込む。

あれは、勘違いではなかったのだろうか？

まだ捕まれた手に感覚が残っている。思い出ただけで身震い。人が地中で生存することが可能なのか。成績上位の僕だったら、納得できる理論を組み立てることが出来るはず。

「馬鹿らしい」

考えることを放棄。結論。あれは勘違い。

それにしても、暑い。窓から入ってくる風はなく、体感気温はひどく高くかんじる。窓から吊す風鈴は全く音を奏でない。

そんなことはどうでもいい。問題は携帯電話を無くしてしまったことだ。しかし、真昼間に山登りをすることは躊躇われた。きっとあの穴深くに吸い込まれている。手を伸ばしても携帯電話らしき物は見つからなかった。シャベルかなんか持っていて、掘るしかないな。

その前に昼寝をしよう。穴掘りなんて、日差しが和らぎ比較的涼しい夕方にしかしたくない。

目を閉じれば、すぐに世界が暗転する。このまま、ストーンとシャッターが降りる。

根太。 根太。

だれだろう？

ぼくの名前を呼ぶ声がする。

ここは、僕たちの場所。秘密基地を作るあの場所。だけど、なにかが違う。

何が。

風がいつもと違う。

木々がいつもと違う。

空気がいつもと違う。

何かが違う。

「けど、僕たちの場所。」

「違う。ここは私達の場合」

風が強く吹き付ける。視界が遮られる。

こんな。

まどろみの中、聞き慣れた声。

「うーん。なんだよ」

電話の子機を押し付ける、僕の母親。

「ほら。真佐美ちゃんだよ」

しぶしぶ、上半身をベッドから持ち上げる。

「ん。真佐美かー」

ゆっくりと、手を伸ばす。子機を手にとる前に、胸に押し付けられる。

夏休み初日からゴロゴロするとか、部屋を片付けるとか色々と言言を言いながら、僕の部屋を出ていく。

なんで怒鳴られてるんだ。

取り合えず、真佐美からの電話の受け答えをしよう。そしたらきっと、重い瞼を持ち上げることも出来るかもしれない。

「ん。どうした真佐美」

少し、真佐美にしては間が長い。何かがあったかなと、悟る。

「こんな、ケータイどうしてる」

どうしたもこうしたもない。

「落として、無くした」

隠す必要もないので、簡潔に言う。

やっぱり、真佐美にしては間が長すぎる。不安になりこちらから尋ねる。

「何かあったの」

うん。と言。

「こんなから、メールや無言電話の着信があった」

目は覚めた。メールや無言電話。ぼやけた頭で、くるくると思考する。結論をくだすために、まず認めなければならぬことがある。しかし、それは容易いことではない。

「いつから」

昼過ぎ。と、真佐美。

僕は、惰眠を貪っていた。まずなにしろ、携帯電話を所持していない。誰かが僕の携帯電話で操作した物だ、と考えるのは自然な流れであろう。

あの時、捕まれた腕の感触が蘇る。

「ごめん、気にしないで。明日説明するから」

子機の電源を切る。真佐美はわかったよーと言つて、さして気にしていないようだった

僕がまだ、何もこの状況を飲み込もうとしていないのに。真佐美の勘違いではないのだろうか。

しかし、この事実を飲み込まなければならぬようだ。子機が電子音をひびかせる。

勝人からだ。

「どうしたの、勝人」

どうしたも、こうしたもないと勝人。

「お前、俺のストーリーカーか？」

やめてくれ。気持ち悪い。たぶん、気持ち悪いのは勝人のほうだと思うけれど。

「メールや無言電話がきたんだね」

勝人は、そうだと答える。

「明日説明する。だから気にしないで」

勝人が、唐突に漏らす。

「明日、俺も秘密基地作りをする。だから、その時に教えてくれ」

少しだけ驚く。真佐美はどうやって勝人を誘ったのだろうか。しかし、今はそのことを尋ねる場合ではない。

うん。わかった。それだけを言って、電源を切る。

またもや、子機が騒ぎ出す。和博からだ。

軽い咳ばらい、そのあとに投げられた言葉。

「気持ち悪いから、やめてくれないか」

それで終わり。一方的に電話を切られる。

もし、親が電話にでていたらとか考えないのだろうか？考えてないんだろうな。

恐れから、少しずつ怒りへと変わっていく。

右手で奇妙な手に捕まれた腕を抑える。実行に移すしか、答えを見つけることは出来ないらしい。

庭に錆びた倉庫があり、たてつけの悪い扉を力付くでこじ開ける。

シャベルを引っ張りだし、ボストンバックに突っ込む。

準備万端。

僕の携帯電話を見つけた。いや、取り戻す。

もう一度、あの場所へ。

携帯電話と手

自転車に跨がり、二度目の坂道。

今度は無事に最後まで足を付かず、乗り切る。

湧き水場の近くの木陰に自転車を停める。

カゴからポストンバッグを引つ張り、山の入口を見る。

このまま、引き換えしても一向に構わない。あれを掘り返すのは、パンドラの箱を開けるのと同じだ。

覚悟を決めるしかない。

息を吸ってー。吐いてー。

「すー、はー」

大丈夫だ。あまり怖くない。

嫌な予感しかしないが、なんとかなる気がする。

山の中へと足を踏み入れる。

今日二度目のこの山は一度目より涼しい。そよ風が木々を縫って、肌を撫でていく。

落ち葉や小枝を踏み鳴らし、歩を進める。

秘密基地を作る、あの場所はあっさりと到着することが出来る。

もうすぐだ。この小道を抜けて、ポツカリと切り取られた空間が広がる。

木々から伸びた小枝がどうしてもどこかに生傷を付けてしまう。

小道を抜け、高く伸びた草を払えばいつものあの場所。木々に閉じられたあの空間。

狭いが息苦しさは感じない。むしろ、生命の息吹を纏い、エネルギーがわいてくるような気持ちにさえなる。

ポストンバッグを地面に置き、シャベルを取り出す。

携帯電話を吸い込んだ場所へ近づく。先刻に来たときに、地の上

をあらかじめ払ったため、剥き出しの細く深い穴が口を開けて出迎えていた。

いきなり穴をほじくり返すのは躊躇われた。まずは、もう一度手を。一旦シャベルを脇に放る。

肩までTシャツを捲くる。心を落ち着かせる。

何事もなければそれでいいじゃないか。だけど直感が告げる。

何かが起こるに決まっている。真佐美や勝人、そして和博に僕の携帯電話からメールを送れるのはダレだ。無言電話が出来るのはダレだ。

たまたまここに来た誰かが、たまたま拾ったのならば納得ができる。残念ながら、こんな人目の付かない場所に落ちている携帯電話を発見するという可能性は低い。

どちらにせよ、自分自身に説明するにはこの穴の正体を暴くしかない。

ゆっくりと手を伸ばす。手を伸ばす。

伸ばして。

伸ばして。

伸ばして。

捕まれるのだ。

人の手に。

震えが止まらない。冷たい手の平の感触、腕を伝わり、頭まで支

配されて行くようだ。

僕は叫ぶしかなかった。この穴にむけて、あらんかぎりで問う。

「おまえは誰だ！」

冷たい手の平の感触が無くなる。助かった。助かったけれど何も解決していないと気づく。

穴のなかを覗き込む。何も見えない。ギリギリまで穴に顔を寄せ
る。

「おい。誰かそこにいるのか！」

すると、僕の顔に直進に飛んでくる物体。僕の反射神経では反応
出来ずに、見事なクリーンヒットをする。

無様に尻餅をつき、当たったオデコを摩る。

薄汚れてしまっているが、僕の携帯電話が直撃したようだ。

僕の携帯電話は無事に見つかった。

しかし、開いたままの携帯の画面にはこう書かれていた。

「あなたは誰ですか。」

こつちが聞きたい。君は誰なんだ。

もう一度手を穴に突っ込む。今度は強く握られることなく、驚
くことはなかった。

穴の中に声を響かせる。

「君は誰だ」

返事はない。喋れないのだろうか。

何かの私情により、声をだせない状況なのだろう。

考えた末に、しぶしぶ携帯電話をもう一度穴の中に落とす。

10分は待たされただろうか。穴の中に手を入れても反応がなく、
携帯電話の安否が心配になったが、無事に穴から携帯電話が飛び出
す。

「教えることはございません。

ふざけている。なんでこれだけの情報しか綴らないのか。

もう一度、声をかける。

「君は、そのまま死んでしまっよう」

率直に尋ねる。普通に考えて地中に埋まった人間が無事なはずがないのである。

そして携帯電話を、再度穴の中に。

またもや、待たされる。

穴から携帯電話が吐き出される。

「私の脈を計ってみてください。

嫌な予感がする。無理矢理嫌な物を飲み込まれる、そんな感覚。手を何度目かの穴の中に。

ゆつくりと冷たい手が僕の手絡む。穴の中は視界は暗く、様子を伺うことは出来ない。

けれども、脈を計ることぐらいは出来る。出来るけどやりたくない。

ほら。やっぱり。

血はながれず、僕には全く刺激が送られない。

僕だけの心臓の音が寂しく響く。

受け入れなければならない。

これは亡霊か幽霊か、いずれにせよ、この世のものではないらしい。

よく、考える。ここで秘密基地を作る。

このままでは、落ち着かない。この穴がある限り。

こんなのがひっそりと存在してるとなれば、喜ぶ奴は和博ぐらいだ。

明日、みんなを集めて会議をするしかない。

真佐美は和博を、秘密基地作りに参加させることは出来たのだろうか？

会議を始めようか

携帯電話を持ち帰った僕は、起こったことを頭の中で整理しているうちに眠りへと落ちてしまったらしい。

目を覚ませば、けたたましい母親の声。

「いつまで、寝てるの！」

朝ごはんも出来たわよと、僕の部屋のカーテンを開け放ち、慌ただしく階段を下りていく足音。

「今、何時だよ」

寝ぼけながら、夏休みに入って時計としての役割をするだけの目覚まし時計を確認する。

予想しているよりも睡眠をとりすぎてしまったらしい。

おはようからこんにちはだ。

かーちゃんが先程残していった、朝ごはんも出来たわよという言葉は嫌みととっても構わないのだろう。

のっそりとＴシャツと半パンに着替え。

階下に降りる。朝メシ飯昼メシを平らげ、すぐに出かける。

「どこ行くの？」

真佐美の家、と自転車に跨がりながら答える。

僕は昨日の出来事を簡潔に話すつもりだ。自転車を漕ぎながら、どのように話そうか考える。

信じてくれるかどうかはわからない。ま、最終手段として現場にあの三人を引っ張って行くつもりではある。

しかし、万が一に僕がキチガイになってしまった場合を頭の片隅に留めておいたほうがいいだろう。

もし、そうだとしたらここまでだ。

自害してしまおう。

たぶん、無言電話やメールがあつたのは真佐美と勝人、和博だけではないのだろう。

特に、異性の方達には気持ち悪くてたまらないに違いない。
勝人や和博ですら、昨日のあの反応だ。

眠りにつく前に、真佐美からメールが届いていた。
明日、12時にわたしの家に来て。

そう、そつけなく書かれたメール。ちなみに、ただいまの時刻は
12時15分。

真佐美に怒られるかもしれない。だぶん怒らないと思うけど。
勝人も真佐美の家にくる予定ならば、1時間は約束の時刻を過ぎ
ると考えていい。

あいつは、いつもなんらかの理由をつけて遅刻する。
それにしても、昨日は一人であたふたしていたため尋ねなかった
が、真佐美は勝人をどうやって秘密基地計画に引き込んだのだろうか？

あいつは、暗記物の教科を必死で詰め込んでいるはずだ。理系の
教科を捨てて上位の大学を狙っている。

そのため、暗記科目の知識をアウトプットしている。
辛いだろうに、借金をかかえてのスタートはそりたつ壁のように
感じるだろう。てっぺんは雲に隠れ見えないことだろう。

中学、高校の予習復習の重さを身に染みて感じている頃だろう。
ざまーみそづけ。

しかし、その勝人をこும்容易くこちらに引き込んだ。

真佐美は侮れない。

あとは和博だ。勝人に対抗するため勉強に力を入れはじめた。勝
人に次ぐ成績の悪さではあるが、勝人と異なる点は自分の成績の酷
さを恥じていた。

恥じてはいたが、それを改善することはしなかった。

夏休み間近、担任が受験生の自覚を持ちなさいと締めくくる。み
んなが様々な思い思いの夏休みを夢見ながら、教室を出ていく。そ
の教室で和博はメガネ軽く持ち上げる。

「俺は最後に勝つ」

こう、断言していた。

だから、今年の夏休みに自分を地獄へとたたき落とす。はいあがつた時、真佐美と根太に追いついているだろう。

夏休みが終わったら、お前らと同じ目線だ。

そう、言い残して去っていった。

だから、和博は勝人よりも手強いと僕は分析している。

自転車を停めて、真佐美の家の前に立つ。

本当にでかい。僕の家のお敷地の10倍はあるであろう。庭にはプール、植物園、そして自由に駆け回るゴールデンレトリバー！。

何回通つても、どこか緊張せずにはいられない門構え。

インターフォンを鳴らして、真佐美を呼び出す。

誰かが応答する。

「すいません。岩城根太ですが、飛田真佐美さんはいらっしゃいますか？」

主が答える。

「おー、こんたか」

主ではなかった。

この声は、野崎和博。なぜ和博が。

だんだん真佐美がどうやって説得したか気になりはじめる。

僕はもんもんとしながら、真佐美の家に足を入れた。

勝手に上がって、勝手に真佐美の部屋にこいと、なぜか和博に指示される。

カンに障るところがあるが、素直に真佐美の部屋に向かう。

この家には螺旋階段があり2階が真佐美の部屋。天井は吹き抜けになっており、広い家がさらに広く見せている。

部屋のドアを一応ノックして中へと入る。

真佐美の部屋にいるのは、和博。ソファで足を組み、紅茶を右手に持ち、和博の前の小机にキーセットが置かれている。

その和博が僕を見上げて出迎える。

「ようこそ。真佐美の部屋へ」

あのフチナシメガネを叩き割りたい衝動に駆られる。

真佐美はというと、自分のベッドにチョココンと座り、はにかんで笑っている。

真佐美のてにはペットボトルのばい、お茶。

聞かなければいけない質問をする。

「なんで、おまえがケーキを食べていて、真佐美がお茶なんだ」

こんなこと聞きたいわけではないかったのに。まんまと和博のペ
ースに乗ってしまう。

なぜか、真佐美が合いの手を入れる。

「最近太り気味なんだよー」

そして、和博が言う。

「最近痩せ気味なんだよー」

和博なんてこんな奴だ。

勝人が到着してから、全てを聞こう。

インターフォンが響く。

時計は北東を指す。約束の時間を2時間遅れ。

勝人にしては合格点の遅刻だ。遅刻の合格点があるのかないのか
は別として。

「真佐美の部屋は涼しいなあ。外は灼熱地獄だぞ」

うちわで仰ぎながら真佐美の部屋に入場。

これで、いつもの四人がそろった。バランスのとれない四人。
さて、会議をはじめよう。

和博、歡喜する

「飲み物、用意してくるねー」

真佐美がベッドから腰を上げて、部屋を出ていく。

僕はぐるりと首を一回転させる。中央にソファー、角にベッドがある。壁に季節ごとにあしらった風景が映えるカレンダー。勉強デスクに和博のケーキセットが乗った小机。今時珍しい、はと時計がひときわ目を引く。

掃除は隅々まで行き届いてるように感じる。だけど、女の子の部屋にしてはかざりつけのない部屋。天窓から自然の光が眩しくない程度に僕らを照らす。

落ち着く部屋である。

「勝人。遅い」

和博が単刀直入で勝人に批判を浴びせる。

「それが、おっきいのがトイレでつまりやがってよ」

念仏のように手を顔の前に上げて答える。すごいなそれ。

それより、と僕。

「メールの内容はどんなのだった」

勝人が携帯電話の画面を僕に向ける。

そこには、日本語としては意味が伝わることのない文章。

「和博は？」

「気持ち悪かったから、消した」

貴重な情報は消去されてしまった。和博だったらメールを残すはずはないだろうことは折り込み済み。

たとえ、メールが消去されてしまったとしても問題はない。

「和博に來たメールも、勝人と同じ？」

ケーキを一口すくい、フォークを自分の口元へ運びながら答える。

「それよりもだ、なんでこんなことをしたのかを説明して欲しいんだけど」

すっかり、忘れていた。和博は秘密基地作りに参加するのかな。

「和博は、秘密基地を作るのに参加してくれるの？」

眉間を人差し指で掻きながら、仏頂面で答える。

「まあな」

本当に真佐美はなにをしたのか。勝人といい和博といい、こんな頭が沸騰するような季節に、ただの僕の暇つぶしに付き合ってくれるなんて。

「ありがとう。君達は僕の成績を超えることはないです」

つつい、二人を挑発してしまう。

真佐美がドアを開けて、アイスティーを二つ運んでくる。

これから楽しい夏休みだ。

真佐美はどうぞーと、僕たちにアイスティーを促す。氷が音をたて歩照った体を冷やす。

「うん。おいしかった」

グラスに添えられたストローは使わずに、氷ごと一気のみをした勝人。

「おそまつさまー」

真佐美が勝人のグラスを自分側へと引き寄せる。

勝人が団扇を仰ぎながらこちらを伺っている。心なしか真佐美も気にはしている様子。

あまり話したくない。信用させることができるだろうか。

一呼吸置いて、まずは本論を述べよう。

「昨日のイタ電やメールは僕のやったことじゃないんだ」

勝人と真佐美は真剣に聞いている。和博はさして興味もなさそうにソファで反り返っている。

「あれは、幽霊の仕業なんだ」

無理だ。こんな馬鹿げた話し信じられるはずがない。

しかし、この馬鹿がいてくれる。

和博が首が吹っ飛ばすような勢いでこちらに顔を向ける。メガネが心なしかズレてしまっている。

「なんていった」

ここまでは僕の予想通りの展開となった。

まず、和博がこの手の話しに飛びつかないはずがないのである。

「僕たちが秘密基地を作ろうとしている場所に幽霊かなにかがいる」僕は情報を付け足して、幽霊という単語を再び言葉にする。

和博の整った顔面が、たちまち崩れていく。気持ち悪い。整っている物体が崩れていく様は気持ち悪さを増幅させる。

勝人と真佐美は目を開けたまま表情が動かない。顔の筋肉の使い方を忘れてしまったみたいに見える。

和彦は我関せず、興奮して収集がつかない。しかし、こんな陳腐な話を信じてくれる和博には感謝でいっぱいだ。

これで二人対二人。なんとか、幽霊の話を冗談として捕らえないように持って行かなければならない。

まずは、仲間を増やすことが鉄則である。

和博は僕の前で歓喜している。鬱陶しい。

「はやくいこう。山へ。俺達の秘密基地へと」

和博の興奮は最高潮に達している。真佐美の部屋を今にも出ていくとする。

このテンションは無理矢理こっちの話しを通すには大きな武器となる。

「勝人と和博は、僕が秘密基地を作ろうとしている場所わかってるんだよね」

真佐美が携帯電話の写メールを見せたよーと、携帯電話をひらひらさせる。

「そこに穴があって、携帯を落としたんだ」

勝人と真佐美は話しを促すように黙っている。和博は真佐美のベ

ツドで体を跳ねさせている。

「その穴の中の人がメールやイタ電をしたと思う。うん、詳しくいえば手の脈はなかった」

間を置いて、二人の様子を伺う。黙ったままだ。

「その手は動いている。けれど、脈をうつていなかったんだ」

勝人が答える。

「お前の携帯に履歴は？」

僕も昨日の夜に確認した。

「残っていなかった」

団扇を仰ぐ手を停める勝人。

「信じられない。少なくとも、俺がその幽霊をみるまでは」

「真佐美は？」

返事を聞きたくて真佐美に顔を向ける。

「そのユウレイさんとお話してみたいねー」

素晴らしい。真佐美はこの陳腐なホラーをあっさり受け入れてくれる。

「面白くなってきたな」

勝人がまた、団扇を仰ぎながら答える。

だから、僕はみんな大好きなんだ。

「山にいったみよう」

すぐに話しがまとまり心底安心する。

いつのまにかドアの前に仁王達する和博。和博はドアを開けて僕たちを誘導する。

「さあ、行こう。俺達の夢あふれる遊び場へ」

テンションは今だ最高ヒートの和博。腕を振り僕たちを外の世界へと連れていく。

女は偉大

四人で川沿いを歩く。午後3時を過ぎてもなおこの暑さ。和博が後ろでコケシのような姿。見ていて痛々しい。

「さっきまでの元気はどうした」

勝人が背中越しに和博を覗くようにして言う。

額の汗を拭いながら愚痴を言う和博。

「俺は帰宅部だ」

続いて、僕も言う。

「僕も帰宅部」

なおも、勝人。

「俺も帰宅部」

真佐美がとどめ。

「わたしも帰宅部ー」

なんて覇気のない青春。嫌いではないけれど。

真佐美が、鞆からペットボトルのお茶を和博のために取り出す。

「お茶だよ。今から坂道も登るんだから大切に飲んでね」

和博はペットボトルを受け取り、がぶ飲み。

「大切に飲めって」

当然なツツコミを入れる僕。和博は坂道で死ぬのではないだろうか。

真佐美はみんなの分もあるよーと鞆を軽く持ち上げる。

「僕がもつよ」

男としては女の子に荷物を持たしたまま黙っているわけにもいかない。

「ありがとー」

お礼を言いながら、鞆をこちらに手渡す。勝人が僅かに慌てる。

「む。俺が気が利かない奴みたいじゃないか」

僕は勝人に真佐美から受け取った鞆を手渡す。

「じゃ、よろしく」

勝人が僅かに眉尻をあげる。

「むかつくな。なんか」

僕は勝人に不敵な笑みを投げる。不敵な笑みを投げ返してくる勝人。

「勝人もありがとー」

真佐美が間に入る様に勝人にもお礼をする。

「不本意な形だが、荷物を持とう」

勝人は苦い表情で荷物を持つ。和博が水分を補給したためか、コケシ状態から復活していた。

角を曲がり、坂道へと入る。今さらながら自転車で来ればよかったと後悔する。

真佐美の家まで自転車で来ていた僕だが、勝人と和博は徒歩で来ていた。

そのため、真佐美と僕は二人に合わせて徒歩で山まで行くことになった。

本音を言うと、僕一人だけでも自転車に乗りたかった。

しかし、ここでまた真佐美がこんなことを言うのである。

「四人で歩けばピクニックみたいで楽しいよー」

真佐美もこの暑さが身体に応えないはずがない。僕も勝人も命を削る思いだ。和博にいたっては死ぬかもしれない。

麦藁帽子を被る真佐美の横顔は汗が浮かんでいる。

相変わらず、忠実にまとめ役だ。

「あついなー」

真佐美が帽子の唾を握り、大きく息を吐く。

意識を失いかけながら歩く和博。

団扇を仰ぎながら180を越す大きな身体で歩を進める勝人。

そして、僕。

この中に一人だけ混ざる女の子。

本当に不思議な存在。

後ろで和博がペットボトルを落として、坂道を転がる音がした。和博はそれを追い掛けることすらしなかった。

やっと坂道を登りきる。湧き水があることに感謝神様アメアラレだ。

和博は水分を補給することでまた元の和博に戻っていた。

僕も真佐美が持ってきてくれたお茶を飲み干し、竹の切っ先から溢れる水を目一杯入れる。

僕たちは木陰で座り込み、ひとまずの休憩。

湧き水の地面を叩く音と柔らかない風が、僕たちの流れる汗を乾かす。

ペットボトルに先程入れた水を一口飲む。

染み渡って、活力が湧いて来る。

僕は聞きたいことがあった。真佐美はどのような方法で勝人と和博をここまで付き合わせたのかを知っておきたい。

勝人は団扇で仰ぎながら、和博と何か話している。

今のうちに真佐美に聞いておこうと思った。真佐美は上ってきた坂道を見下ろしている。

ゆっくりと近付いて、真佐美の背中に声を掛ける。

「どうやって、真佐美や和博を言いくるめたんだ」

真佐美が麦藁帽子を深く被り答える。

「セミさんとおんなじだよー」

セミさん？

様々な方向から響くセミの声。今は夏だー、夏だーと必死に僕たちを訴えかけている。

「ごめん。どういこと」

真佐美が僕に伝えようとしていることが何なのか、僕なりに必死に考える。

真佐美は寂しそうに透き通った瞳で僕を写す。

水を入れたペットボトルを高く挙げて、光がキラキラと乱反射していた。

真佐美は風に乗せて言葉にする。

「夏休みが終わったらお別れ何だい」

僕は再び意味が理解することが出来なかった。そんな僕に、真佐美がもう一度。

「この夏休みが終わったら転校するんだ」

言葉にした。

寂しく笑っている。けれど僕は何か言うことは出来なかった。

だって、小学校からこの四人で僕の生活が回っていた。そこで一人が欠けることなんてあつてはならない。

「だから勝人と和博も、こんなずっこいやり方を使って誘ったんだよ」

僕が泣き虫なのだろうか？彼女は泣いていないのに、僕だけ泣くなんて。なんて情けない。

「そういうことだ」

勝人と和博がいつの間にか僕の後ろに立っていた。勝人が僕の肩に大きな手を置いている。

「だから泣くな」

と、勝人。

「気持ち悪いぞ」

と和博。

「うるさい」

と、僕。

真佐美は静かに僕の目の前で笑う。深く被った麦藁帽子の奥で涙が伝っているのが見えた。

女の子はこつも強いのか。性別が違っただけでこつも心の強さが違うものなのだろうか。

僕は秘密基地を作ることの大きな意味を今理解した。

どこまでもそこに

山道を進む足音四つ。

勝人や和博、真佐美もこの山は庭みたいなものなのだろう。

迷いもせずに、進んでいく。

小さい山とはいえ、人の手が加えられていないので、どこもかしこも同じ道にしか見えない。

だけど、僕たちは僅かな目印を見つけて、迷わずに動くことができる。

ここにも僕たちの思いが強く残留し続けている。

勝人も和博も真佐美が転校する話は知っていたようだ。しかし、惨めに泣いたのはぼくだけだった。

和博にも勝人にも馬鹿にされた。いつも通り真佐美は僕を宥めてくれていた。

父親の都合らしい。ここに残ることを強く希望したのだが、彼女の願いは聴き入れなかったらしい。

初めて親に泣きついたとも言っていた。小学校からいつも一緒にいたんです。最後までお願いします。

頭を下げた懇願した。

「だけど、ザンネン」

真佐美は寂しくわらっているだけだった。

和博はまだオオクワガタを収穫することを夢見て探しているらしく、片っ端から木を蹴飛ばして揺らしていた。

僕はその様子を見ながら、和博の足の骨が折れてしまわない心配になる。

彼は本当に骨折することが多く、些細なことでポツキーのように骨を折っていた。

僕が知っているだけでも八回は骨折をしている。

勝人も自分の好きなノコギリクワガタをさがしているのだろう、

いつものポイントをチェックしている。彼もまた、自分の経験を頼りに歩いているのだ。

僕の肩が二回刺激が軽く送られる。

僕は後ろを振り向く。

目前にカブトムシ。艶があり黒々としており、ギミックのような音がする。真佐美がカブトムシの角を持ち上げ、僕に掲げているのだ。

「おつきいでしょー」

カブトムシの足が不規則に揺れる。久しぶりに僕もヒラクワガタを探そうかと思いはじめる。

「相変わらずカブトムシなんだな」

後ろから僕たち二人に声を掛ける勝人。その手には、ノコギリクワガタ。

顎が刺々しく力強い。立派な大きさのノコギリクワガタ。

和博も何も変わらない。手にはコクワガタ。

「オオクワガタみつからなかったんだねー」

小さくてかわいいと和博の見つけたコクワガタを撫でる。

「触るな。こいつはお前の全てをかみちぎる」

メガネを挙げて自慢げにしている。

僕もいつものポイントに立っている。幹が太く立派な木。見上げれば、樹液に群がる先客。その中に僕の好きなヒラクワガタが足を休めていた。

それを手の中に収める。僕は笑う。

「勝人のノコギリクワガタなんてバラバラにしてやる」

勝人は笑う。

「真っ二つにしてやるよ」

真佐美も勝負に乗る。

「カブトムシが王様だよー」

和博は話にならない。

「挟まれたら一番痛いぞ」

確かに。一度コクワガタには痛い目をあわされた。顎が小さい分、肉がもぎ取られるほど痛い。

また、懐かしい闘いが始まる。

ルールは至って簡単。腕の太さと同じくらいの木株を見つける。

そこに互いの相棒を乗せる。

ルール1、地面に降りたら負け。

ルール2、背中を向けたら負け。

ルール3、これは真剣勝負。

この三つが鉄のルールとされている。

僕はヒラタクワガタを愛でながら、勝人に勝利宣言をする。

「勝人のノコギリクワガタは勝てない」

勝人も堂々と構える。

「お前のヒラタクワガタ、震えてないか？」

売り言葉に買い言葉。

互いの相棒をお見合いをさせる格好で準備。

軽く怒らせる程度に指で小突く。

調度いい具合に興奮する。勝負開始の合図。ジリジリと互いの距離を詰める、僕のヒラクワガタと勝人のノコギリクワガタ。

勝負は一発で決まってしまう。先に挟み込まれたら負け。

まず、僕のヒラタクワガタが挟みに掛かる。互いの顎が擦れて、鈍く響く。

勝人のノコギリクワガタの怒りが最長点に達する。一気に距離を詰め、顎を振り回す。それを弾くように頭を降る、僕のヒラタクワガタ。再度、距離を詰めてくる。

ここで、僕のヒラタクワガタが巧に身体を入れ替える。勝負ありだ。無防備な横腹から挟み込む。振り回された勝人のノコギリクワガタは木株から足が離れる。そのまま地面へとたたき付けられた。

「これで勝率はドローだ」

僕はガッツポーズをして喜ぶ。今までの勝人との戦績は10対9

で僕が負けていた。この勝負で10対10となる。

「うむ。身体ばかりで根性なしだったな」

そう漏らす勝人は、ノコギリクワガタを古木にしがみつかせ逃がしてやる。

僕もヒラタクワガタを逃がす。

その間に和博と真佐美の勝負は終わっていた。和博のクワガタは真佐美のカブトムシに吹っ飛ばされてどこかへといなくなってしまう。

寄り道をしながらも秘密基地を作る場所へと到着する。目前の高い草を手で払う。四人で久しぶりにこの空間に入る。

「久しぶりだな」

勝人がまじまじと、木々を一本一本確認するように目線を動かす。和博も懐かしそうにメガネの奥の瞳に風景を映す。

「変わってないな」

「そうだねー」

静かに変わっていくはずなのだ。形あるものに永遠はない。だけどここにだけには存在しているかのように。いつまでもそこに有り続ける、僕たちのように。

そう、僕たちのように、有り続けなければならない。

どうして、僕たちが変わらなければならないのだろう。

僕は光の届かない穴の中に視線を移す。変わらず、吸い込むような暗闇が口を開けている。

僕はその暗闇に歩み寄る。

「ここ」

僕はその穴を見下ろしながら、みんなに示す。

真佐美も勝人も眉を寄せている。和博だけがその穴を興味深く覗き込んでいた。

どこまでも深く続いている。どこまでも僕たちも続けばいいのに。「一人ずつ、手を入れてみてくれない？」

僕が幻を見つづけているのかどうか、これでわかるから。

僕の手だけに

予想はしていた。やっぱりこうなるのか。

和博が手を入れる。奥まで突っ込む。

「ただの穴だ」

泥を払いながら答える。次に真佐美が手を穴の中に。

「寝ちゃってるのかなー」

残念そうな顔。勝人もお構いなしに手を穴に押し込む。

「こんな茶番に付き合わされるとは」

両手を軽く持ち上げて、鼻で大きく息を吐く。こうなる予想も考えていたけど、これは一番最悪な予想であることは言うまでもない。僕はやっぱり幻を見ていたのだろうか？ そうだとすれば、また携帯電話の問題へと戻らなければならなくなる。それにしても悲しい。だって、今の僕の状況が痛い人だからだ。

ゆっくりと僕が穴の中に手を入れる。手を伸ばす。

伸ばして。

伸ばして。

伸ばして。

人の手に捕まるのだ。

どうして、僕だけが。

もう、僕は怖くはなかった。どこか冷めた目線で穴の奥底を見下ろすことができる。

「離して」

その冷たい手は絡む指を解いていく。僕はポケットの中に手帳と

ボールペンを持ってきている。こちらのほうがこの手とスムーズに交信が出来るはずだ。

ポケット手帳とボールペンを穴の中に放る。勝人と和博の目線が背中越しからも突き刺さる。まるで鋭利な刃物で何度も心臓をえぐられるみたいだ。

真佐美も徐々に不安になってきている。僕に合いの手を入れようと、手を伸ばす。

それを手で制止、待ったを掛ける。

一分ほど経過して手帳とボールペンが穴から吐き出される。良かった。もし無事に事が進まなければ、本当に自害していたかもしれない。

勝人と真佐美はこの現象に驚く。和博は嬉々として手帳とボールペンを拾い上げる。

そして和博が手帳を開く。そこには文字が書かれている。

ーうるさいです

ただ一言、だけど十分な一言となってくれた。もし、僕が手帳とボールペンの中に入れて反応がなかったとする。僕は自ずと幻覚を見ていたことを認めざるおえず、許してくださいと地面に頭を擦りつけなければならなかっただろう。

驚きを隠せない、真佐美と勝人。和博は盛りの犬みたいにうるさい。

「ま、こういうことなんだ」

心の奥底で一息吐きながら僕は答える。

勝人がゆっくりと僕の手帳とボールペンを受け取る。

「こちらの声はきこえているのか？」

僕は、たぶんと首を縦に降る。

穴の前でしゃがみ込む勝人。

「そこで、何をしているんだ？」

僕と同じ様に手帳とボールペンを投入。そして、返事がかえってくる。

「眠っておりました。」

「なぜ、ここに？」と勝人。同じことを繰り返す。

「迎えが来るのを待っております。」

和博が俺も聞きたいことがあると、穴の中へと声を響かせる。

「あなたは幽霊なのですか？」

「そうかもしれません。私が死んでから結構な時が流れました。」

真佐美がお話したいと、と和博と交代。

「ここに、頻繁におとずれると思います。お邪魔してもよろしいですか？」

僕は驚く。この存在を知ってもなお、ここで秘密基地を作ること中止にしないことに。

真佐美はメモ帳とボールペンを落とす。

「ここは、わたしと大好きな人との大切な場所です。他を当たって欲しいです。」

大切な人と書かれた文字は、滲みが強く、気持ちさがこめられている。なにか強い意思が伝わってくる。

真佐美が不思議な感覚だねーと、笑みを浮かべて僕に同意を求める。

僕はもつと不思議な感覚の中を漂っている。この手が掴むのは何故、僕の手だけなのだろうか？何か意味があるのだろうか？

ただの気まぐれなのかもしれないけど、頭の片隅で引っかかり続けた。

ペーパーコミュニケーション

僕たちは、打ち解けていく。幽霊と打ち解けていく。和博と真佐美はずっと穴と話しつつづける。勝人と僕は、この二人から心持ち距離を取り、さりげなくつぶやく。

「おい、これは大丈夫なのか？」

「僕も心配になってきた」

勝人は二人の方向をさりげなく覗く。自ずと穴も目に入る。

「俺はまだ信用出来ない」

「僕もまだ半信半疑だよ」

これまでの穴と僕たちの手帳を介してのコミュニケーションからわかったことがある。

この手は女であること。待ち人がいること、それも長い間待ち続けていること。彼女にとって、ここは大事な場所であること。眠りつづけていた事。そして、僕の手と触れ合うことで目を覚ましたことである。

彼女の名前は小美野美月と名乗っていた。長く地中で眠りつづけていたことになる、美月。もう、素直に楽しんだ者勝ちなのかもしれない。穴の前で談笑する、和博や真佐美のように。僕の手帳を入れては受け取りを繰り返し、交換日記を続けているみたいだ。

しかし、それにより、彼女の情報が僕の手帳に溜まっていく。いささか趣味が悪いが持ち帰ったあとにじっくりと読ませてもらう。このまま放っておくわけにもいかない。美月を屠るための貴重な情報源となる。だけど、美月を屠るキーワードは、やっぱり待ち人だらう。

「でもなー、待ち人って言われてもなー」

頭を掻き乱しながら、僕は呟く。

「たぶん、そいつも死んでいるのではないか」

僕が悩んでいることを読み取る勝人。

一番の有力情報ではあるが、これは本人に突き付けてもいいのだろうか。悲しむだけならまだいい。僕たちを呪ったりするんじゃないだろうか？

呪うとか考えてる時点で僕は美月という存在を信じはじめているということに気づく。

「危ない！」「当たれ！」

突如、真佐美と和博が叫ぶ。僕と勝人は急な大声に驚く。ピンポン玉ほどの大きさの小石が僕と勝人の頭に直撃する。

「いったー」「いったー」

同時に頭を摩る。一緒に僕の手帳も飛んで来ていた。最後のページを開く。

ー迎えに来ると信じております

「聞こえてたのか」

勝人は穴の方に視線を向ける。

「そうみたい」

それにしても痛かった。和博の発言がすごく引つ掛かるけど、置いてくとしてしよう。

真佐美が僕たちにむかって駆け寄って来る。

「だいじょうぶ？」

覗き込む用にして、僕たちの額を確認する。

「うむ。大丈夫だ」

「うん。大丈夫、大丈夫」

和博は、僕たちを指差してほくそ笑んでいる。

「石を投げた張本人より、アイツがむかつく」

指をで示す勝人。当然ながら指を刺されているのは和博である。

「お前が悪い」

指を指しかえず和博。たまにストレートに言い返せない言葉を投げて来るから救えない。

それにしても、本当に信じて待ち続けていることがわかった。直接には尋ねにくい事柄だったので助かったとも言える。

「美月すっごい良い人だよ」

僕の手帳をめくり、真佐美の言う美月が良い人だということを示すページを開く。

そこには、わたしはサクランボが大好きです、と書かれている。

「サクランボが好きだと、良い人なの？」

「当然だよー」

当然のように胸を張る真佐美。美月は待ち人を、どのくらいの時間を待ち続けてるかは分からないけど、一途であることは確かなのだろう。

少し顔を落として真佐美が言う。

「やっぱり、恋人さんだよー」

真佐美の拳が心持ち強く握られる。

「ま、そうだろうな」

勝人は先ほどの美月の地獄耳を気にして、用心深く言葉にする。

「でも、本当に幽霊っているんだな」

和博は腕を組んで答える。「て、ことはだ」と和博が続ける。

「待ち人の幽霊もいるんじゃないか？」

「そうだといいね」

僕は心のそこからそう思う。

「それよりも、本当に美月はみんなの手を握ってはくれないの？」

そして、気になっていることを吐き出した。

「うん」「ああ」「おう」

三人とも同時に答える。

風が一際強く吹き、枯れ葉が空へと舞い上がった。

真佐美の願い

何故、僕たちに存在を明かしてもなお、僕以外の三人に手を握るという、決定的物理的証拠を提示しないのだろうか？

本当は眠りを妨げた僕に怒り狂っているのかもしれない。

手帳に綴られた美月の文字は、僕たちに感情まで伝えきることは不可能だろう。まして、顔の見える対人同士ですら相手の本音まで見通すことは難しいのだから。

手っ取り早い方法がある。掘り起こしてしまうことだ。そしたら何もかもが終わりを迎え、僕たちは気持ち良く秘密基地作りに取り掛かれるかもしれない。どう考えても無理だなと悟る。和博は美月の墓を暴くことを躊躇わないだろう。真佐美は確実に首を縦には振らない。

「美月がダメって言うてるんだからダメー」

と、こんなふうに分れるんだから。

「美月にもプライベートがあるんだよー」

眉をへの字にして睨みつけてくる真佐美。

「だってさー、このままじゃ成仏出来ないじゃん」

僕は困りながらも訴える。そこにまた、手帳が穴から吐き出される。

ーよけいなお世話です。

「わかったよ」

ため息を吐きながら手帳を拾い上げる。和博は残念そうである。また、穴を覗き込んで無理矢理姿を確認しようとしている。そして、石つぶてを受けて咆哮をあげている。

和博も集まり、何事もなかったかのように強がる。

「ここに秘密基地をつくるんだろ？」

勝人が続ける。

「美月を説得しなければならんな」

僕も考えていたけれど、説得する良い手段が見つからない。

真佐美が麦藁帽子を脱ぎ、穴に近づく。

「美月。ここで、秘密基地を作らせてください」

相手には見えているのか見えていないのか、わからないにも関わらず、地面に深々と頭を下げる。要するに、土下座だ。

「真佐美、そこまでしなくても」

僕は美月の行動を止めようとするが、勝人がやらせておくと、肩を掴まれて制止させられる。

和博も黙って真佐美の行動を見つめている。

真佐美は地面からわずかに顔を持ち上げる。

「わたしはもうすぐ、ここに来ることが出来なくなります」

穴の奥へと深く反響する。

「大好きな人達ともお別れしなければなりません」

時間は止まりはしない。時計は睨んでいる間は全く針が進まないくせに、幸せな時を過ごしているとあつという間に進んでいるのだ。

「形に残しておきたいんです」

ゆつくりと、真佐美が穴に向かって笑いかける。

「いつまでも残ることはないと思います」

僕たちは真佐美がいてくれたから楽しい時間を過ごせたことに、いまさら気づく。時間が過ぎるのは本当に早かった。

「だけど、一つ形を作りたいんです。私たちの形を」

また、頭を下げる真佐美。僕は穴に近づき、手帳を投げ入れる。後は、美月の答えを待つことしか出来ない。

静かに待つ。勝人も和博も余計な言葉を吐かない。ただ、待っていた。僕も真佐美の力強い背中に見とれる。

「リーダーは昔から真佐美だな」

自然に言葉が出てしまった。昔から真佐美は僕たちのまとめ役。

手帳が穴の奥から出てくる。

勝人と和博が吹き出す。

「その通りだな」「あいつは強いもんな」
ゆっくりと真佐美が手帳を拾い上げる。

「ここは、私たちの場所。だけど、今は残っていないのかも知れませんね。許可します。」

最後のページを僕たちに見えるように広げる。

偉そうだなと、思いながらも嬉しかった。僕たちはここに秘密基地を作る許可を得た。

真佐美も腰をあげて、麦藁帽子をかぶりなおす。

振り向いた真佐美の顔には、満面の笑顔が咲いていた。

変だ、オカシイ

明日の計画を、大まかに組み立てる。僕の我が儘から始まった秘密基地作りが、ここまで順調に行く。

この木々に囲まれた場所で四人で座る。尻が障害物で痛みはするが、問題ない。

「段ボールは俺が持つてこよう」

勝人が口を開く。

「じゃ、僕は遊び道具全般を」

「秘密基地といったら宝物は必須だろう」

和博がしたり顔で言う。

「ぬいぐるみをたくさん持つてくるよー」

真佐美の部屋にはぬいぐるみは全く飾っていない。しかし、隣の部屋には、キャラクターものやファンキーなぬいぐるみだけで占領する部屋がある。

「あまり持つてくるなよ」

嫌そうな顔の和博。

「和博に似てるぬいぐるみもあるんだよー」

抱えきれないぐらいのぬいぐるみを持つてくるつもりなのだろう。

真佐美の笑い声が響く。

「やめてくれ」

本当に良かった。これで僕は真佐美が笑った顔を見ることが出来る。

ひとしきり秘密基地の制作手順をまとめて、僕たちは腰をあげた。日が沈み空が真っ赤に燃えている。周囲は暗くなりはじめている。

「そろそろ、帰るか」

勝人が話をまとめて言う。

「そうだな」

和博が大きな欠伸をする。僕も誘われて欠伸をしそうになるが、

噛み殺す。

「明日からが楽しみだねー」

そう、明日からが僕たちの四人の形を残す、大切な時間。

「本当に楽しみだね」

秘密基地を作る空間となるは、いつまでも形が変わらない、永遠の場所。

ゆっくりと再度、見回す。ひっそりと在りつづける、深く細い穴が目に入る。

「明日もまた来るって伝えてくる」

僕は手帳とボールペンを持って近づく。どこまで続いているのか、日が落ちたために、なおさら深淵に見える。

「僕たちは明日も来るよ」

そういつて、手を穴の中に伸ばす。指が一本ずつ絡んでくる。僕は笑う。もう恐怖することはない。この手が僕たちに危害を加えることはないのだ。

「秘密基地を作することを許してくれてありがとう」

まだ、冷たい指は僕の手を握りつづける。もしかしたら別れが寂しいのかもしれない。

「離してよ。手帳が入れられない」

軽く引つ張るが、離れない。引つ張るが、離れない。強く引つ張るが、離れない。

僕はいつから、この存在に心を許してしまったのだろうか。握られた手は、僕を締め付けて来る。

「みんな、助けて」

もう片方の手で助けを求める。勝人も和博も真佐美も、この空間から出ていく。どうして？

僕の声が聞こえていないのか？

冷たい手は、僕をゆっくりと引きずり込む。僕の身体を無理矢理に細く深い穴の中へ。

僕は三人が、秘密基地を作るこの空間から出ていくのを見る。

「こつちを見てよ」

勝人が出ていく。和博が出ていく。真佐美が出ていく。

僕は穴の中へ穴の中へと徐々に沈み込んでいく。変だ、おかしい。なんでこうなるんだ。

ついには上半身も穴の中へと吸い込まれる。視界は何も見えなくなる。あらゆる骨が変な方向へと曲がるのがわかる。

当然だろう。この穴は腕一本を通すだけが限界なのだから。

暗闇の中、声が聞こえる。

「ふざけないで。あなたは どうして」

美月の声がする。泣いているのか。僕は、意識がそこで断ち切られていく。

手の平が僕の顔面を覆う。

「どうして」

口の中に泥が入ってくるので喋りづらいが、僕は聞かなければならない。

「僕の手だけを握るの？」

暗闇を漂う。深海魚になった気分だ。僕の手はまだ握り続けられている。美月の手には温度が無い。それが無性に悲しい。

僕は暗闇を漂う。

やがて、意識も泳ぎはじめる。

明日からが楽しみだ。顔を覆う手の平は震えているきがした。

過去

僕は小学生の頃に、女の子に出会った。引越して間もなく、春休みを終えて初登校日を迎える一日前。学校の校門前に女の子が立ち尽くしていた。

どうして僕が校門前にいるかというと、一度だけ僕が通う学内を探検してみたかったからだ。もちろん春休み最後の一日である。学校には生徒の姿など目につかず、活気は無い。しかし、それがまた雰囲気をだしており、冒険しがいがあるのだ。だけど先客がいた。

麦藁帽子を深く被り俯く女の子。学校の存在をまるで目には写さず、足元の影を睨む。

どうしたのだろうか？ 気になってしまふ僕がいた。でも、女の子は苦手だ。うるさくてうるさくて。何であんなに耳につく声なんだろう。女の子の高く鋭い声が苦手だった。

「わたしと交代してよ」

奇妙な言葉をつぶやく。

校門前の桜の花びらが舞う。桜の木が綺麗だ、と今頃気づいて顔を上げる。同時に僕に気づいた女の子は、こちらに視線を移す。

「あなたは人を殺したことあるのー」

人ではなく何か他の生き物のように儚げだった。

桜の花びらが地面に落ちると同時に、校門前の女の子は消えていた。

後ろから声が掛かる。その声は頭を優しく巡る。

「あなたはだーれ？」

麦藁帽子を被る女の子。初めての真佐美との出会いだった。第一印象は綺麗な声だな、と思った。

「僕は岩城根太、ここに引越してきたんだ」

声音は高すぎず、少し掠れる声。

「わたしは飛田真佐美だよー」

ゆつくりと手を僕に差し伸べる、真佐美と名乗る女の子。

「うん。よろしく」

「よろしくー」

その手は温かった。

爽やかな朝

目を開ければ、染みが広がる古い木造の天井。部屋のベッドで目を覚ます。

懐かしくて暖かい夢を見ていた気がする。いつまでも漂っていた夢だった。

上半身をあげるも、目がかすみぼんやりとしている。頭を振り無理矢理に覚醒する。しばらくベッドで微睡み、ようやく地に足を下ろす。頭の回転は悪いけど、気分は良い。

自分の部屋を出て、階段を下りる。リビングに入ると、お父さんが新聞を眺めながらコーヒーを飲んでいる。

「おはよう、お父さん」

お父さんは新聞を綴じてこちらを見る。心なしかすごく嬉しそうな表情だ。

「何？ 朝ご飯を食べるのがそんなに珍しい？」

視線を新聞に戻し、コーヒーを飲む。

「いや、本当にめずらしくてね」

挑発には乗らず、自分でご飯をよそいで、テーブルに置く。味噌汁を暖めるためにコンロに火をつける。僕もコーヒー飲もうか飲まないか悩む。結局、味噌汁が温まり、湯気を出しはじめたのでコーヒーを諦めて、お父さんの席の前で朝食を取る。

新聞をめくり、覗くようにして僕を見る。

「身体の調子は大丈夫か？」

一瞬、何を尋ねているのか分からなくなる。

「どうして？」

確認のために僕は聞き返す。新聞を机のうえに置き答える。

「いや、なんでもない」

寂しそうな表情を見せる。お父さんは席を立ち革のバッグを肩に掛ける。

「じゃ、出かけて来るよ」

「うん。いつてらっしゃい」

いつてらっしゃい。久しぶりにこの言葉を口にした気がする。お父さんは残ったコーヒを飲み干し。玄関に向かう。

僕も出かける準備をしなければならぬ。爽やかな朝だ。だけど、小骨がどこかに引掛かっている違和感が残りつつける。忘れようと思えば、すぐに忘れられる、そんな違和感。

洗面所へと向かい、顔を洗う。鏡に映る僕の顔がぼやけて見えた気がした。

洗面所を出て、またすぐに着替える。今朝は早く起きたし、二度寝も至福な夏休みだろう。豪快に顔を洗いすっきりしたところで、自分の部屋へと戻るため階段に足を掛ける。

「湧き水、汲みに行つてきなさいよ」

響く母の声。回れ右をして、玄関へと向かう。こうなることはわかつてはいたんだけれど。

自転車のカゴにペットボトルを4本入れて、庭から外へと押し出す。

自転車に跨がり、母への恩返しをする高校息子。付け加えるなら、借金している自分が悪いんだけど。

初動のペダルを一際力を入れて踏み、一気に心のギアを入れ替えた。

川が光を受けながら様々な射影を生み出す。その川沿いを一気に駆け抜けていく。そして見えてくる角を曲がれば、坂道が目前に立ちはだかる。スピードにのって登る。

「くっ...はっ...」

少しずつペダルに重しが掛かり回すのに苦勞をする。中盤まで来れば、後は意地との勝負。体力が切れたら負けだ。

後、少しだ。後少しで目の坂道が終わる。

「こんたー、おはよー」

後ろから前へ、ベルの音が追い抜いていく。

坂道を登っているのは、女の子。立ち漕ぎすらしていない。涼しい顔で僕を追い抜いていく。

ハンドルを離してしまい、虚しく自転車はアスファルトを削った。

ゆっくりと自転車を押しての到着。

「登りきれなかったねー」

電動自転車が日光を浴びて光を放つ。くやしきなんかない。

「電動自転車くれ、美月」

そう、彼女の名前は美月。頭の中に染みが広がっていく感覚。

僕は今、何て言った？ 美月、みつき？ どうしたのだろう、頭が痛い。どうしてこうなったのだろう。

「ダメだよー。高かったんだからー」

当たり前だ。そんな簡単に譲るモノではない。そう、普通は。

美月は笑っている。なんでこんなにも眩しいのだろう。僕はなんで気づかないんだ。

名前がでてこない。大切な名前なんだ。

「こんた？」

僕は行かなければいけない。自転車を路上に転がし、山へと向かった。おかしい、何かがおかしい。

僕自信がおかしいのか？

選択

走る。足が溝に埋まり、バランスを崩す。手をつき、身体を立て直す。蟬が泣きはじめる。これからが夏が始まるんだ。四人の秘密基地を作り、形を残す。ダレのために？ 僕はただの暇つぶしのつもりだった。でも、それには大きな意味があると、気づかせてくれた。鬱陶しい草を払いのける。

僕たちの秘密基地を作る場所にたどり着く。

「勝人、和博」

息が詰まり、荒く、大きく呼吸する。そこには勝人と和博がいた。振り向く二人は、僕を見て驚く。

「どうした？ そんなに慌てて」

「幽霊でもみたんじゃないのか？」

膝に手をつき、心臓を落ち着かせる。

「ま...」

声が出ない。

「真佐美は？」

顔をあげて、二人に尋ねる。

「真佐美？ 真佐美がどうかしたのか？」 首を傾げて答える勝人

「それより、こんなに朝早くからどうした？」 嫌らしい笑い方をしながら言い、そして僕に聞き返す和博。

「そんなに秘密基地作りが楽しみだったのか？」

「それよりも、真佐美は？」

焦りながらも感情を抑えて、再度尋ねる。

勝人が僕の空気を察して、僅かに顔を厳しくする。

「何があつたか聞きたい」

僕は美月にあつた。真佐美と同じ顔、同じ声。どれもが真佐美と似通い、だけど確実に違う。説明は出来そうにもない。だけど、ここにたった一つの希望がある。

「勝人、和博、どいてくれ」

僕は勝人と和博で隠れた穴を確認するために駆け寄る。

「あ．．．穴が無い？」昨日までは確かにあった、その場所に膝をつく。

「どうした？ 根太、お前変だぞ？」勝人が心配して、僕の背中に声を掛ける。

ゆっくりと風が流れる。木々が揺れ、一つ、二つ、小枝や枯れ葉を踏み歩くりズムが聞こえはじめた。

僕はまだ地面を見下ろし、動くことは出来ない。

「お、真佐美か」勝人が驚いた顔をする。

「なんで真佐美もこんな朝っぱらから来てんだよ」と含み笑いをしながら言う和博。

僕も背中越しに、顔だけを後ろへ向ける。足元からゆっくりと見上げる。

「美月．．．？」

勝人も和博もわかんないのか？ あれは美月だ。僕がおかしくなっているのだろうか？

「おはよー」

なんて、明るい笑顔だ。穴があつたはずの地面をかく。柔らかく暖かい泥を握る。

「朝早くから山で秘密基地作りとか」心持ち肩を降ろす勝人。

「ま、受験生のやることじゃないな」と続ける和博。

いつまでも、表情をさらけ出してはいられない。僕はどちらかの行動を選択しなければならない。

この目の前の女の子を美月と認識するか、真佐美と認識するか。僕は。

「お早う。真佐美」

こうするしかない。僕がキチガイになってしまったんだ。

「さっきも挨拶したよー」

真佐美の笑顔が、酷く歪んで見える。

「こなた、まだ水汲み終わってないでしょ？」

「・・・うん」

秘密基地の入り口から出て行く真佐美。

「一緒に帰るよー」

僕は誘われるようにその場を後にした。

二人つきり

山道をゆつくりと歩く。木陰の下からだ、太陽を見上げることが出来る。

山見をゆつくりと歩く。真佐美の一步一步が短く、自然と僕も歩くのが遅くなる。

勝人と和博には用事を済ませてから戻ってくると言い残してきた。真佐美の横顔を眺める。何が楽しいのか、ずっと笑っている。真佐美が僕の視線に気づき、目を細くする。

「秘密基地を作るの、楽しみだねー」

「うん。楽しみだ」

僕は頭の中を整理する。

真佐美が美月に見えてしまった。これは、考えないことにする。考えたところで答えを出せそうにないだろうし、おかしくなってしまうたのは、僕の可能性が高い。

だけど、穴が消えてしまっていることは？ 駄目だ。頭の中が何物かの手によって掻き乱されているかのようだ。こんな状態ではまとまるものもまとまらない。

真佐美が僕の顔を伺って来る。そして、考える表情を言う。

「湧き水場で、こんたはわたしのことを美月って呼んだよねー」

やっぱり、美月はみんなの記憶から消えてしまっているのか。

「美月ってだーれ？」

どうして僕に聞いてくるんだ。僕だって分からないのに。

「わたしのこと、美月って呼んでたよねー」僕の前を歩く真佐美が、身体を反転させて、こちらを向きながら再度尋ねる。

「何でもないんだ」

ごまかすことしか出来なかった。僕はやっぱりおかしくなったのか？

真佐美が首を横に振る。瞳に映る僕の影が揺れたように思える。

目を伏せ、静かな声音が響く。僕の真佐美の第一印象、そして女の子と初めて友達になれそうだと思うきっかけとなった声。

「こんた。あなたは間違っていないよー」

僕が、間違っていない。裏返すならば、真佐美は今の状況を説明できるということなのだろうか。

後ろ向きのまま歩く真佐美は、僕にいつもの笑顔を見せてくれる。僕もゆっくりと笑みを返す。

「うん。秘密基地を作ろう」

そうだ。僕がしなければいけないことは、当初から決まっている。もちろん。今も人形をいっぱい持つてくるために帰ってるんだから」

「そつえば、僕も遊び道具を持って行くって言っちゃったっけ」

突然、ボックスステップで歩いていた真佐美の身体が、ストンと落ちる。木の根が地中へと張り出しており、高低さでバランスを崩したようだ。

「危ない！」

反射で手を伸ばし、真佐美の手を引つ張りあげる。

「あ、ありがとー、びっくりしたよー」

僕は、真佐美の手首を握ったまま動けずにいた。女の子の体重とはいっても、片腕一本で支えているのは力がある。

真佐美は滑らした片足を、ゆっくりと安定した地面に降ろす。同時に僕も握った手を離れた。

「大丈夫？」

どうして、こうも冷静でいられるんだ？僕は、いまほど自分を褒めたいと思ったことはない。どんなに成績がよくても、財布を交番に届けたとしても自分をこんなに褒めたいとは思わない。

「だいしょうぶだよー」と真佐美が言う。

真佐美の手は冷たかった、尋常じゃないほどに。そして、脈がなかった。だけど、僕は気にしてはいられない。これから僕たちの、夏休みの始まりの合図となってくれるのだから。

遊び道具

家の庭に乱雑に自転車を転がし、玄関で靴を脱ぎ捨てる。階段を駆け上がり、自分の部屋へ。

押し入れの中に要らないものやら要るものやら様々なモノで埋め尽くされている。本当のことを言うと、あまり押し入れはいじくりたくない。捜し物をするだけで、部屋に余計なモノが流れ込んで来ることが容易に予想することが出来る。しかし、遊び道具はここに詰め込まれている。

「開けるしかないか」

独り言を言ってしまうほどに、ここを開けてしまうのは煩わしい。襖は噛み合わせが悪くなっており、角度を変えながら何度も引つ張らなければ、開放することが出来ない。何度も引つ張り、何とか襖を開けることに成功する。

洋服や本、筆筥、ごみ箱など様々なモノが目に入ってくる。それらを押し入れから取り出し、床に置く。作業を繰り返すと同時に、部屋が足の置場も無くなっていく。わかつてはいても、うんざりしてくる。

押し入れにスペースが空き、奥に古くて大きな段ボールが見えはじめた。

「なんで、こんな奥に片付けたかな」とぼやきながら、段ボールに手を伸ばす。

何かに引っ掛かっているようで、力を入れても引つ張り出すことが出来ない。無理矢理引つ張り出すと、押し入れの奥で豪快に崩れる音がした。僕はそんなことを気にはしない。

その段ボール箱の中身は、ケンダマやらベイゴマやらカルタが詰め込まれている。昔からの馴染み深い遊び道具。使い込まれた跡がしっかりと残っており、懐かしい。

僕はそれを一つ一つ持ち上げて、刷り込まれた思い出を取り出す

かのように観察する。懐かしい、いつまでも忘れられない大切な宝物。僕はそれを心で感じながら、確信した。

「・・・そういうことか」

僕は一つ一つの思い出を感じながら、全ての意味をしる。涙が溢れてはこぼれ、拭ってはこぼれ、僕の思い出を濡らしていく。いつまでも、馬鹿騒ぎをして、ケンカして、仲直りして、また笑って、繰り返して、青春していきताかった。誰でも考えてしまう。このまま時が止まれと。

「みんなゴメン」

徐々に身体が消えていく。僕は全てを知ってしまった。それならば、僕は、もう続けることは出来ない。たとえ、みんなと遊ぶことが出来なくなっても、時を進めなければならぬ。このまま永遠の時間の中で居続けることはしてはならない。

「どれか、一つを持っていったって罰は当たらないよな」

僕の得意だった、ベイゴマを持って行く。

「僕は死んだんだな」

頬を涙が濡らす。僕の秘密基地まで届けてくれ。この思い出の詰まった段ボール箱を。

「みんなゴメン。僕は先に行く」

僕はゆっくりと永遠の時の針を進めた。いつまでも僕は、四人で居続けることは出来ないんだ。

身体がゆっくりと世界に溶けていく。光の粒子が流れて、あの場所へと続く。

美月

待つて。待つてよ。

手を伸ばしても届かなくなることはわかっていた。わたしの場所
は此処しかない。誰かが気づくまで、私は孤独。長い間、暗闇を漂
い、泳ぎ、それにも飽きて、眠る。いつか誰かが私を目覚めさせる
と信じていた。でも、いつまでも光が照らすことはなかった。

待つて。待つてよ。

長く眠りつづけることに苦痛を伴い、足掻く。しかし、足が無い
ことに気づく。私は死んだんだな。死ぬことはこんなに辛いものな
のかな。泣こうとしても目がないことに気づく。久しぶりに呼吸を
してみようとすると口や鼻が無いことに気づく。耳を済まして心
臓の心地好いテンポが伝わらないことに気づく。私が動かせるのは
左手だけであることに気づく。痛くはない。私は一瞬で身体の大部
分を失った。痛みを感じる前に黒の世界へと行くことが出来た。こ
んな、あなたのおかげ。それでもわたしは眠る。

だから、待つて。待つてよ！

手に何年ぶりの刺激が走った。久しぶりに感じた痛み、私の
意識は水をかけられたかのように覚醒する。白の世界から手が伸び
てくる。私はその手を握ることをしてもいいのだろうか？

迷うわけにはいかない。その手が白の世界に戻って行く前に、掴
まなければならぬ。私をまた引っ張りあげてくれるかもしれない。
私は無我夢中でその手を握った。体温を感じた。懐かしい体温だ。
握った手を話すことが出来ない。だけどその手は、強い力で振り
ほどき、私を置いて白の世界へと戻っていった。こんたの手だ。き
つとこんたの手だった。

この暗闇に黒の世界に光が満ちはじめた。

こんたが、何かを落としていった。四角い物体だ。適当に操作を
する。人の声が聞こえてくる、不思議な物体。わたしは適当に操作

を続ける。また、声が漏れはじめる。漏れてきたそれは、わたしの声と似ている、いいえ、これはわたしの声ではないだろうか？ わたしはこの子と会ってみたい。わたしの居場所をこの子に伝えた。久しぶりにお話するのは酷く疲れた。わたしの伝えたいことをわかってくれただろうか？

あなたと会えれば、わたしはきっと、こんなと繋がる。

真佐美

携帯電話が震える。根太からの着信だ。手を伸ばし携帯電話を耳元に持って行く。

「．．．あ．．．し．．．き．．．」

切れ切れに声が届く。その声はひどく聞き覚えがある。

「あの、どちら様ですか？」

ノイズが酷く、こちらの声がとどいているのかどうか不安になる。しかし、こちらからはどうしようもない。

「や．．．に．．．山に．．．あの場所へ．．．」

やっぱり、届く言葉の半分も聞き取ることが出来ない。けれど、今拾った言葉から、理解するために十分な情報量であった。私は怖いという感覚と共に、別な感情も生まれていた。懐かしいと愛しいが混ざり合った感情である。私は携帯電話の電源を切る。

電話の主が伝えたいことは、だいたい予想することが出来る。たぶん、あの場所にいるのだろう。だけど、行くべきか行かないべきか悩む。何かに巻き込まれる予感もする。根太の携帯電話から掛かってきたということも気になる。

「真佐美ー！お昼ご飯よー！」と階下から母親の声が響く。

「うん。わかったよー」

うん。決定。お昼ご飯が大好きなメニューがあつたら、あの場所に行く。無ければ行かない。これで悩まないで判断できる。

軽い足取りで部屋を出て、一階に下りる。そして、ダイニングルームへと向かう。母親がさっき届いたのよーと段ボール箱いっぱい詰まった、サクラノボを自慢する。母親は表情を緩ませて喜んでいる。私もそれを見て、笑顔にならずにはおれず、つつい手を伸ばして遊び食いをする。

「こーら！これはデザートなんだから！」と母親も手を伸ばす。

「お母さんも食べてるよー」と私ももう一口。

二人で笑い合いながらつまみ食いをする。私はあの場所へ行くことを決定した。

「暑ーい」

麦藁帽子をかぶって外に出るも、暑すぎて身体が溶けそうになる。父親に買ってもらった電動自転車に跨がり、ペダルを踏むために力を入れる。川沿いを進み、曲がり角を折れる。坂道に差し掛かるも、電動自転車のおかげで軽い力で坂を上っていく。根太や和博も電動自転車を買えば楽チンなのにと考えているうちに、湧き水場へ到着。ここから整備されていない自然なままの道であるから、徒歩で行けない。木陰に自転車を立てかけて、湧き水で水を直接飲む。母親からは、直接飲むのはお腹に悪いからやめなさいと言われているけれど、やっぱり直接飲むのが一番美味しい。自然のそのままの力が身体の中に入ってくるのがわかる。気のせいかもしれないけれど、麦藁帽子をかぶり治し、山の中へと歩を進める。

ゆつくりと歩く。久しぶりにこの山の中を歩く。木々の隙間を縫ってくる風が心地好い。空気が美味しい。木漏れ日が綺麗。良いところがあるまま残っていて、無性に幸せな気分になる。

「カブトムシも元気かなー」

慣れた道を歩きながら、カブトムシの集まるポイントを探す。夜行性ではあるのだが、第一ポイントで意外にも簡単に見つかる。溢れる樹液に惹かれて呑気に食事にありついていた。

「見つけたー」

久しぶりのカブトムシに舞い上がってしまう。手の中に収め、軽く角を突く。

「頑張つて、お嫁さん見つけるんだよー」と言い、すぐに元の木に解放する。

しかしお腹いっぱいになったのだろう、羽を広げて低く擦れた音を奏でながらどこまでも飛んでいった。

「元気いっぱいだねー」

私達の夏もこれから始まるんだなーとぼんやり考えていた。

脇道に入り小道となる。小枝が肌を突いて来る。目の前に高く伸びる草を手で払う。懐かしい空間が広がり、私の心も包まれる。そこは時間が閉ざされている場所だ。

私はゆっくりと、足を踏み入れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5029u/>

手に手を繋ぐ

2011年9月1日03時27分発行